

human

No251

2013/3

医療を通じて人と人とのふれあいを広めるために
ヒューマン(人)と名付けました。



「東北復興支援(ハンドクリーム)」

救急指定・労災指定病院	さくら総合病院	愛知県丹羽郡大口町新宮1-129 (0587)95-6711(代)
老人保健施設	さくら荘	愛知県丹羽郡大口町新宮1-96 (0587)95-6722
訪問看護ステーション	あすかビレッジ	愛知県丹羽郡大口町新宮1-10(太郎と花子内) (0587)95-8623
ヘルパーステーション	あすかビレッジ	愛知県丹羽郡大口町新宮1-10(太郎と花子内) (0587)95-8026
居宅介護支援事業所	あすかビレッジ	愛知県丹羽郡大口町新宮1-10(太郎と花子内) (0587)95-8027
デイケアセンター	御 嶽	愛知県丹羽郡大口町新宮1-129(さくら総合病院2F) (080)5294-5728
有料老人ホーム	太郎と花子	愛知県丹羽郡大口町新宮1-10 (0587)95-0111



<http://www.ijinkai.or.jp>

E-mail: info@ijinkai.or.jp

ふっ切れた死生観

―ヘミングウェイの「老人と海」の老人の場合― (続々)

大森澄雄

舟の方が魚よりも小さいので、魚を舟にのせるわけにはいかない。

そこで、舟に縛りつけたあと、老人がまず思ったことは、(家に帰ったら、あの子と二人で(綱を)継ぎ合わそう)ということであった。子供のことを思い浮かべるのは、これで八度目である。外洋に出る前に、子供が手伝おうかと真剣にいったのに対してはつきりと断った老人には、本来は子供と一緒にゆきたかったに違いない。これまで外洋に出て子供のことを思い浮かべた(ことば)から、あるいは(思い)から、極めてひしひしと感じられる。しかし、こんどの思い

(八度目)は、それらとは異なる。かつての大物の魚の釣り師としての誇りにこだわる老人は、八十五日目も不漁かも知れないという内心の危惧から、結果としての不面目な姿を子供の前に晒したくはなかった。それが子供に断った、そして表には出さなかつた本来の理由ではなかつたのかと私は考える。そこで老人一人の、一か八かの八十五日目の出港となつたのである。しかし、八度目の(思い)には、面目が立ったとか、誇りを回復できたとかいう気持ちはあつても表情に出すまではない。至っていない。ようやく余裕が出てく

ると、老人は捕らぬ狸の皮算用を始める。(千五百ポンドはこえる代物だ。ひよつとすると、もつとかかるかもしれない)などと。しかし、それはひとときの夢にすぎなかつた。海には鮫が多い。(最初の襲撃があつたのは、その一時間のちのこと)である。老人の捕えた魚の出した血が海面に拡がり、その匂いを嗅いだ鮫が襲ってきたのである。舟に縛りつけてある魚にまっしぐらに迫ってくる鮫の頭に、老人は銛を打ち込んだ。襲ってくる鮫は一匹だけではない。老人は捕えた魚に希望を持っていなかった。(あるのはただ決意とそして(鮫に

対する)まったき敵意だけだつた)。老人には捕えた魚の肉を食い荒らしにくる鮫がゆるせなかつた。迫ってくる鮫と壮絶な戦いを繰りひろげ、最後の鮫を殺した時には、魚の肉は鮫にいくちぎられて殆ど骨だけになつていた。陸地に近づいた時に、老人は子供のことを思いだす。(あの子だけは心配しているだろう)と。九度目である。出港前に手伝おうかといつて、漁に関しての自分の腕前を高く評価して、いてくれた子供の自分を慕う気持の強さを、老人は改めて感じたのである。夜中に港に戻った老人は、

疲れた体で、しかも一人で帆やマストを片付けたあとベツトに横たわり、眠りに落ちた。朝、子供が訪れた時にも老人は眠り続けていた。近くのバー(テラス軒)でコーヒーを受け取って帰っても、老人はまだ眠っていた。起きるのを待って、子供はコーヒーを温め、老人に飲ます。それから、二人の会話は弾む。老人が「お前がいなくて寂しかったよ」といい、「また二人で一緒に行こうよ」と子供は応える。老人は反対はするが、出港前ほどではない。それどころか、今度海に出る時に持っていく物についての、老人の子供への依頼のことばがつづく。

街の人は殆ど骨だけになった大きなまかじきを見て驚き、噂となった。あの漁師が計ったところ、へ鼻の先から尻尾まで十

八フィート(大森注・五メートル四十九センチ)あったという。

老人が昔日の誇りを取り戻したことはいうまでもない。

ところで、世の中には沢山の死生観が存在するのだらう。私の頭には、まず次のような死生観が浮かぶ。

死を前提に置いて、生きることよりも死をえらぶという死生観。この死生観は一般に武士社会において通用した。江戸時代中期に佐賀藩の藩士山本常山によって口述された『葉隠』(岩波文庫本)の中にある、「聞き書第一」の二にある文言が有名で、その一部を引用しておく。

〈本文〉

武士道といふは、死ぬ事と見付けたり。二つくの場にて、早く死ぬかたに

片付くばかりなり。別に子細なし。胸すわって進むなり。

原文のみでは読みづらい箇所もあるので、序でに、三島由紀夫著『葉隠入門』(新潮文庫本)に附載されている笠原伸夫の訳文を加えておく。

〈訳文〉

武士道の本質は、死ぬことだと知った。つまり、生死二つのうち、いずれを取るかといえば、早く死ぬほうをえらぶということにすぎない。これといってめんどろなことはないのだ。腹を据えて邁進するだけである。

院長さんが私に「ふつきれた死生観」といわれた時、むろんこんな死生観を頭に置いていわれたわけではあるまい。ただし、この死生観は前の大戦中に復活して、多くの若者を死地へ、と赴かせた死

生観ではある。

この文章の冒頭近くで、院長さんのさきのことばを聞いていた時、私はヘミングウェイの「老人と海」の主人公である老人の生き方を思い浮かべていた。と書いたが、私が思い浮かべていたのは、実は、次のような死生観であった。

生を前提に置いて、事の成就のために全力を傾けるが、途中で不運なことに命を落とす結果になったとしても、やむをえないという死生観。

ヘミングウェイの「老人と海」の老人の死生観を、私は以上のように理解している。

○テキスト

新潮文庫本『老人と海』



さくら総合福祉センター太郎と花子 施設長 岡本一聖

私、このたび“さくら総合福祉センター 太郎と花子”の施設長として、赴任しました。岡本一聖です。

私は、東京の杉並で生まれの東京育ち(高校まで東京)ですが、生粋の江戸っ子ではありません。両親共に岡山県出身です。縁あって名古屋に参りました。今では名古屋に東京の二倍以上住み続け、立派な名古屋人となりました。時に高校の同級生とあって話をした時も「名古屋弁で話しているな」と言われても、どこが東京弁で、どこが名古屋弁なのか判らなくなりました。運命なのか、長男でしたが東京に帰らず、名古屋に住み続けることになりました。

名古屋市立大学卒業後、麻酔科入局し、その後愛知医科大学麻酔蘇生科に配属され麻酔、ICU、救急の仕事をしてまいりました。その後臨牀を離れ、名古屋市救命士養成所講師や愛知医科大学救命センター非常勤講師をし、その間さくら総合病院には、20年位前の大口クリニックの時代より時々麻酔業務でお世話になっておりました。

10年位前より、福祉施設でも勤務する機会があり、今度こちらの施設に誘っていただき、勤務することになりました。月曜日は、以前と同様に手術室にて麻酔業務を担当し、そのほかは、“さくら荘”と“太郎と花子”に勤務することになります。以前さくら総合病院では、麻酔のみで勤務しており、病院全体に関わることはありませんでした。このため“太郎と花子”だけでなく“さくら総合病院”自体のシステムや状況が把握できていません。今後、何かとご迷惑をおかけするとは思いますが、ご教授とご支援をお願いいたします。



さくら荘 事務長 松本富夫

昨年6月1日に入職しました松本富夫と申します。愛知県蒲郡市出身で56歳、前職は保険業界であり、医療介護業界は初体験となります。

配属先の『さくら荘』についてご紹介させていただきます。『さくら荘』は、平成8年5月老人保健施設として誕生、今年17年目を迎えます。その造りは、明治・大正の古き良き時代の懐かしさを伝え、和洋折衷の深みと温かみのある風情があります。ご入所者様に馴染んでもらえるよう生まれ育った頃の住宅環境と同じ木造2階建、床や家具は全て本物の木でできています。木の温もりに触れることは生理的に良く落ち着く効果があります。照明はガス灯のようなほのかな明るさで、瞳孔が開くことでリラックスでき身体に良いといわれます。また、断熱効果や保湿効果に優れた外国製ガラスの導入など、ご入所者様の健康や安全・安心に対して細心の配慮がなされた、こだわりのある素晴らしい施設です。

医療体制は、胃ろうや経鼻など医療依存度の高い方の受け入れが可能であり、多くの病院から高く評価されています。このことは、困っている人を救済しようというポリシーのもと、施設長・看護師・介護職員の皆さんが献身的な努力を長年積み重ねてきた賜物といえます。

救急医療から介護まで地域に大きく貢献する当法人で働けますことは、大変光栄であり誇りに思います。そして、ご入所者様に寄り添えるこの仕事は、大変やりがいがあり尊いものであると感じます。これからも、入所者様・ご家族様・地域の皆様に、より信頼され愛される施設となりますよう努力していく所存です。どうぞよろしくご指導ご鞭撻をお願い致します。



さくら総合病院 医事課課長 河本繁樹

私は、平成24年6月1日付でさくら総合病院に入職いたしました河本繁樹と申します。

入職して間もなく9ヶ月になります。その間、職員の皆さんには一部、業務上のお話をする事で挨拶させていただいた方を除いて、全体朝礼での職員紹介以降お話をしておりません。HUMANの紙面をお借りし、改めて自己紹介させていただきます。

私は、昭和28年4月13日生まれの59歳、男性です。家族構成は、妻が一人、子供は、2名で男女各1名ずついます。既に学校を卒業し職に就いております。

生まれた所は、愛知県のはずれで多治見市に近い瀬戸市という小さな田舎町です。

皆さんご存知かも知れませんが、陶土採掘のため一面草木のない鉱山と、子供の頃は土色の水が流れていた瀬戸川が中央に位置する陶器の街です。ご多分に漏れず、私の義父は、今年82歳ですが日展作家、陶芸協会員として現在でも制作活動をしております。

市街地を少し離れると山があり田畑が広がっており、さくら総合病院の周囲と非常によく似た風景が見られます。私は、ある意味では生まれ育った環境に近い所で仕事をさせていただいており、大口町という街に親近感を抱いております。

また、さくら総合病院については、コンドル館の外観に少々驚きました。院長先生にコンドル館のデザインコンセプトを伺い、如何に自分の発想が観念的、保守的であり、患者さんの立場で考えていなかったかを痛感しました。現在では、患者さんへの優しさが根底に流れているものと理解しています。私が所属する医事課は、さくら総合病院への入口(受付)と出口(会計)を担当する部署です。この部署の優劣により病院の印象は大きく左右されます。朝一番、患者さんを明るく爽やかにお迎えし、心地よくお帰りいただける窓口を作らなければならないと思っています。また固定概念に捕らわれず自由な発想を持ち、患者さん、職員の皆さんに満足していただける病院経営を目指し努力していく所存です。今後とも宜しくご指導ご協力いただきますようお願いいたします。

第23回 「健康を守る教室」

テーマ：『体脂肪の燃やし方～健康的に体重を落とそう!～』
&セラバンドを使用した体操

日時：平成25年3月23日 土曜日
13:00～14:00(受付12:30～)

場所：新館1F ロビー
講師：理学療法士 管理栄養士

参加料：無料

お問い合わせ：受付窓口もしくは医療連携室 Tel 0587-95-0015



肥満と言うと体重や体型ばかり気になりますが、生活習慣病との関連でいえば、肥満とは体脂肪が必要以上に増えた状態のことなのです。体脂肪が増えすぎて肥満状態になると様々な病気を引き起こしますが、エネルギーを貯蔵したり、内臓を保護するなど、生命活動に欠かせない重要な役割もしています。今回は体脂肪を効率的に燃やし、健康的に痩せる方法をお知らせします。

皆さまお誘いの上、ご参加ください。

※健康を守る教室の体操コーナーでおなじみのセラバンドを健康教室終了後に下記価格で販売をいたします。
ご希望の方はお申し出下さい。 黄色(弱)400円 緑色(中)460円 青色(強)520円

